

# 3回目 モイモイのモイ (一歩一歩のたった一歩)



## 最初の岩場、 ブノン・チエリアにて

雨季に入った6月のある日、アンジェリーナ・ジョリーの映画「ズームレーダー」のロケ地となった幽玄な雰囲気のプロム遺跡へ出掛けた。窮屈な中庭に「Do not climb」と書かれた立て札があった。なぜか「Climb」という文字が点滅して見えた。禁断症状？

奥さん曰く「あのさ、クライマーに書いてる訳じゃないから」。翌朝、Benjamin Tipton (ベンジャミン・ティプトン) と表示された差出人から、様々な方面に出まくったメールの返信が来ていた。開けると目を眩る文面!! ブノン周辺にエリアがあること、30人くらいの欧米人クライマーが彼の管理するメーリングリスト、CCS (カンボジア・クライマーズ・ソサエティ) に登録されていることが分かった。

早速、僕もそこに名を連ねさせてもらう。日本人第一号。かくして雨季中盤の8月末、僕はベンジャミン・ティプトンと同行することになった。前夜、僕は新品の60mロープを持って、ブノンベンのバックパック定番のゲストハウスに投宿、るんるん気分で見りにいった。翌朝6時にベンがトゥクトゥク (オート三輪) でやってきた。ジャニーズ系の若者なので驚いた。まるで鏡を見ているみたいだ (冗談です)。アメリカ、オハイオ州から来て農村開発のアクティビスト (活動家) として国際NGOで働いていると言った。僕の年齢を言うとき「わくお、お父さんと同年齢だ」などと言う。ややたじろいだが僕は、軽く咳払いしたあと、クルに「ア〜ハ」とキメタ。途中、さらに3人のクライマーをピックアップ、乗用車に乗り換えて、2005年に彼らが開拓したブ



プロム遺跡の中庭にある立て札。'Climb' だけが気になってしまった。でも警告するぐらいだから、いる訳だ、実際、登っちゃうひと。遺跡って見ると登りたくなるんだ、確かに。ちゃんと(?)ハングしてるし、いいサイズのクラックもあるし。でも問題行動なのは間違いないので抑えて抑えて(白戒〜)



岩場に集まってくる近所の子供たち。老練なガイドのように取り付きままでを先導したり、ブッシュを刈ってくれたり、スズメバチを退治したり、様々にマメ〜。中にはハーネスのねじれを指摘する子までいて驚かされる。ベンたちが蒔いた種はもはや伝統になりつつあるって気がする 2011/11/20

ン・チエリアへ向かった。国道に沿って3つの大きな岩塔が立っていた。狭い裾野にこじんまりとした集落がある。取り付きに向かうと子供たちが付いて来た。ベンの友達のパラックはマツチョマンで年中何か食べていた。彼はツナ缶を開けると自分の分を取ってパンに挟んでから、缶を岩の上に置く。やがてナイフをしまい口元をぬぐい食事が終わった動作をする。ここで子供たちは初めてそのツナ缶を手にした。リーダー格らしい子が、パンと一緒にみんなに分ける。観光地でパンや水をもらって喜ぶ子はまずいない。たいていはお金を無心して取る。しかしベンたちと接するこの子たちは何かが違った。一連の振る舞いにはある種のルールが見取れた。クラッグの開拓にベントちは農村開発の作法を導入していたようだ。

ローインパクトの精神が息づくそれを、僕はエリック・シプトン (※) の奥義と呼んだ。シプトンは1930年代カラコラム踏査のとき、細やかな手法で辺境の人々の中に溶け込んでいった。そしてそれが僕のロールモデルとなった。

(続く)

※エリック・シプトン(1907~1977年)イギリスの登山家、探検家、著述家。エベレスト初登頂へのルートを発見、100ほど前のアフリカ、ヒマラヤ、カラコルム、ヨーロッパ、中央アジア、パタゴニアの未踏の地に足跡を残した。